

翼階に置いて、時々読みたてまつる。神護景雲三年歳の己酉に次るとしの夏五月の二十三日丁酉の午時に火を發し、惣家みなごとく焼け滅す。ただし彼の経を納めたる筥のみ、盛なる燭火の中に有りて、かつて焼き損ふ所無し。筥を開きて見たてまつれば、経の色儼然しくして、文字宛然なり。八方の人視聞きて、奇異びずといふこと無し。諺に知る、河東の練行の尼の写せる如法経の功茲に顯る、陳時に王与女の読める経の火の難を免れたる力再示ると。贊に曰はく「貴きかな、檀本氏、深く信ひ功を積みて一乘経を写す。護法の神衛りて、火は靈しき験を呈す」といふ。是れ不信の人の心を改むる能きものなり。談にして、邪見の人の惡を輟むる類たる師なり。

二の目盲ひたる女人薬師仏の木の像を帰敬ひて現に眼を明くること得る縁 第十一

諾楽京越田池の南蓼原里の中の蓼原堂に薬師如来の木像在す。帝姬阿倍天皇の代に当りて、其の村に二の目盲ひたる女有り。此一の女子を生み、年七歳なり。寡にして夫無く極めて窮しきこと比無し。食を索むること得ず、將

に飢ゑて死なむとして、自づから謂はく「宿業の招ぶ所なり。ただし現報のみにあらず。徒に空しく飢ゑて死なむよりは、善を行はむに如かず」とおもひて、手に手を控かしめて其の堂に送り、薬師仏の像に向ひ眼を願ひて曰さく「我が命を惜むにあらず。我が子の命を惜む。一は是れ二人の命なり。願はくは我れに眼を賜へ」とまうす。檀越見矜みて戸を開き裏に入れ、像の面に向ひて称へ礼ましむ。二日を逕て副ひたる子見れば、其の像の臆より桃の脂の如き物忽然に出でて垂る。子母に告知らす。母聞きて食はむと欲ひ、故に子に告げて曰はく「搏りて吾が口に含めよ」といふ。然うして食へば、はなはだ甜し。すなはちまた目開く。定めて知る、心を至して願を發す、願はば得ずといふこと無し。と。是れ奇異しき事なり。

二の目盲ひたる男敬ひて千手観音の日摩尼の手を称へて現に眼を明くること得る縁 第十二

奈良京薬師寺の東の辺の里に、盲ひたる人有り。二の眼精盲ひたり。観音を帰敬ひ、日摩尼の手を称念へて眼の闇きを明けむとす。昼は薬師寺に正東の

一末詳。
 二晨朝、日中、などという定まつた時に。
 三七六九年。五月二十三日は庚寅にあたる。丁酉は五月三十日。五月二十三日が丁酉となるのは宝龜四年(七七三)。午時は、午前十一時から午後一時のころ。
 四整った姿であること。法苑珠林・敬法篇・感心縁に、狐元軌の如法潔淨にして書写した経が火事に遭うも焼けずに「宛然如故」であったとす。
 五そこであつたこと。法苑珠林・敬法篇・感心縁に、狐元軌の如法潔淨にして書写した経が火事に遭うも焼けずに「宛然如故」であったとす。
 六河東の練行の尼の書写した法華経は、龍門の僧法端の目には文字をあらわさなかつた(冥報記・上)。この説話は諸書に収録されているが、いずれも「如法」「如法経」という表現を含まない。法華経書写に關して「如法経」が説かれる例に、集神州三宝感通録・下・嚴禁の条がある。七末詳。

第十一縁 今昔物語集・十二ノ十九に書承。
 八平城京の東南隅、左京九条あたりに所在したか。五徳池はその一部分の跡地か。
 九所在不明。
 一〇末詳。

二いかなる宿業か、という具体相は述べられない。
 三いたずらにむなしく飢ゑて死ぬことは、善行をおこなうことに及ばない。「徒空飢死」と「行善」とを比較し、「行善」をえらぶ。
 四食を錢でなく眼を願つてゐる。薬師如来本願経の「第六大願、願我來世得菩提時、若有衆生、其身下劣、諸根不具、醜陋頑愚、瞽盲跛躄、身體背偻、白癩癩狂、若復有餘種種身病、聞我名已、一切皆得菩提、諸根具足身分成滿」(第七大願、願我來世得菩提時、若有衆生、諸患逼切、無護無依、無有住处、遠離一切資生医薬、又無親屬、貧窮可愍、遠難得聞我名号、衆患悉除、無諸痛惱、乃至究竟無上菩提)という願にかかわる説話、とする松浦貞俊の指摘がある。
 五私の一つの命は、私と娘との二人の命である。
 六底本訓釈「搏(取也)」。

第十二縁 今昔物語集・十六ノ二十三に書承。
 一「千手観音の手のひとつ。日精摩尼」とか、太陽を象徴した宝珠を持つ。「日精摩尼手」と称されることが多い。若為「眼闇無光明者」、当「於日精摩尼手」(千手千眼観世音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經)。「日摩尼手」(若人欲眼開求光明者、可修「日摩尼法」(千光眼觀自在菩薩秘密法経)。「称」は陀羅尼を唱える意であろう。千手千眼観世音菩薩大悲心陀羅尼經千光眼觀自在菩薩秘密法経には、「日精摩尼手(日摩尼手)に關して全く異なつた陀羅尼を掲載している」。
 二秋篠川の傍とす。
 三「外見上は眼珠が正常で、視力が無いこと」。
 四「薬師寺の千手観音は未詳。薬師寺縁起に又二休観世音菩薩像、坐高」として孝徳天皇の皇后御願の一体と、後代の一体とを流記帳によつて述べるが、孝徳天皇の皇后御願の一体がこれにあたるか。
 五「薬師寺の堂塔は南面して建てられていた。東門は奴婢門(薬師寺縁起)。原文「昼坐薬師寺於正東之門」」。

門に坐て布巾を披敷きて、日摩尼の手の名を称礼む。往き来の人の見哀ぶ者は、
 錢と米と穀物とを施して中の上に置く。或るは巷陌に坐て称へ礼むこと上の如
 くす。日中の時に鍾を打つ音を聞き、其の寺に参入りて、衆の僧に就きて飯を
 乞ひて命を活けて数の年を経たり。帝姫阿陪天皇の代に至りて、知らぬ二人来
 りて云はく「汝を矜むが故に、我れ二人、汝の盲ひたる目を治さむ」といふ。
 左右おのおの治す。治し了りて語りて言はく「我れ二日を運てかならず是の
 処に来らむ。慎待ちて忘れざれ」といふ。其の後久しからずして倏に二の眼明
 く。平復ゆること故の如し。期りたる日に當りて待てども、終にまた来らず。
 賛に曰はく「善きかな、彼の二の目盲ひたる者、現生に眼を開きて遠く大方に
 通ひ、杖を捨てて空手に能く見能く行く」といふ。誠に知る、観音の徳の力と
 盲人の深き信となり、と。

法花経を写さむとして願を建てたる人日を断つ暗き穴
 に願の力を頼みて命を全くすること得る縁 第十三

美作国英多郡の部に、官の鉄を取る山有り。帝姫阿陪天皇の御代に、其

の国司役夫十人を召発して、鉄の山に入らしむ。穴に入りて鉄を掘取る。時
 に山の穴の口、忽然に崩れ塞り動く。役夫驚き恐りて穴より競ひ出づ。九人
 僅に出でて一人後れて出づるひと有り。彼の穴の口塞り合ひて留る。国司上
 下、圧されて死にたりと思ふ。故に惆悵ふ。妻子哭き愁へて、観音の像を図繪
 き、経を写し、福の力を追贈りて、七々日を運ること已に訖る。時に独穴の裏
 に居て念はく「吾れ先の日に法花大乘を写し奉らむと願ひて、いまだ写さずし
 て断えたり。我が命を全くして給へ。我れかならず果し奉らむ。聞き穴に居て
 惆悵ふ。生長れる時より今日に至るまでに、此の哀に過ぎたること無し」と
 おもふ。彼の穴の戸の隙に指刺すばかり開きて、日の光被至る。一の沙弥有し
 て隙より入り来りたまひ、鉢に饌食を盛りて、以ちて与へて語りてのたまは
 く「汝の妻子は、我れに飲食を供り、吾れを雇ひて救ふことを勧ふ。汝は
 また哭き愁ふ。故に我れ来るなり」とのたまひて、隙より出で去りたまふ。去
 りたまひて後に久しからずして、居る頂に當りて穴開け通り、日の光照り被及
 るなり。穴の開け通ること広方二尺余高五丈ばかりなり。時に三十余人、
 葛を取らむとして山に入り、穴の辺より往く。穴の底の人、人影を見て叫びて
 言はく「我が手を取れ」と云ふ。山人側に蚊虻の音の如きを聞く。すなはち聞

一 手拭。和名抄染浴具に「手巾 太乃占比」。
 二 陀羅尼である。

三 「日中は六時のひとつ。僧は正午を過ぎたならば食事をしてない(上巻二十四縁「齋食」)。多くの僧の食べ残しを乞い集めたのである。

四 観音を信仰したので視力が回復した、とされずに、観音を信仰したので治療する人がやって来て治療した、とされていることに注意すべきであろう。どのような治療行為がなされたかは未詳。千手千眼観世音菩薩広大圓滿無礙大悲心陀羅尼経には「盲眼暗」の治療方法が述べられている。詞梨勒果(ミロク)の果実、鞞醯勒果(ニイタカミロバラン)の果実)をそれぞれ一個、搗き碎いてすりつぶし、白蜜または男子を生んだ女の乳をまぜて目にさし、観音像の前で呪を一千八遍となえ、室にこもって七日間、目に風をあてない。

五 上文の「必来」是処二が視力の回復を意味していたことが示される。

第十三縁 三宝絵・法十七、扶桑略記・元明天

皇条に引用。三宝絵より本朝法華験記下・一〇八に書承。本朝法華験記より今昔物語集・

十四ノ九に書承。

六 岡山泉英田郡。

七 美作国の調に「鉄」がみえる(延喜式・主計上)。英多郡に隣接する播磨国佐用郡にも鉄を産する(播磨国風土記)。

八 下文より推せば、坑道は垂直方向に掘られていたか。
 九 穴をふさぐようにして次から次へと崩れてくる。
 一〇 やつこのこと。

二 穴をふさぐ状態になって、崩れる動きは止まった。

三 穴の中にとじこめられた人の妻子。
 三以下は、死者に対しての追善の行ないが述べられる。妻子は、男は穴の中で圧死した、と思つているのである。男の生存を祈願しての行ないではない。

四 妙法蓮華経であろう。
 五 中陰(中有)の期間。一 中巻二十八縁。

六 下文によれば、この食は妻子が追善のために供えたもの、と推測される。追善のための供物は最終的には死者のものに届くと考えられていたのであろう。冥報記・上に、類似点をもつ説話が存する。山にて銀を採掘する男が穴にとじこめられたが、男の父の餽飯を受けた僧の呪願によつて一鉢飯を持った沙門が穴の中に来て男の飢えを防いだ、と。

七 このような表現は珍しい。
 八 すわつていた上方に。

九 原文「自穴辺往」。穴の辺を通つて往く、の意であろう。